



【平山 昭男 さん】 富丘 / 65 歳

●元宮大工として培った技術を生かし、現在は、割り箸を使った芸術作品「割り箸アート」の展示会や教室などを開催している。

「割り箸アート」で伝える 木のぬくもり

※町内会や学校などで「割り箸アート」教室を開きます。お気軽にお問い合わせください。

細い割り箸を一本ずつ積み重ね、精巧につくられた木の芸術作品。

「子どものころは、近所の大工さんに材木の切れ端をもらって工作などをしていました。とにかく木が好きなんです」と、15歳のときから使い続けている彫刻刀を眺めながら話すのは、作者の平山昭男さんです。

神社や寺などに関わる宮大工として活躍し、引退した後も木から離れることはなく、一年ほど前から身近にあった割り箸で船・汽車・飛行機などの乗り物や歴史的な建築物の芸術作品をつくるようになりました。

まつすぐな割り箸は、湯で煮ることやわからかくなります。頭の中で描く設計図にあわせて箸を丁寧に曲げ、ボ

ンドで接着し、彫刻刀で削って仕上げます。曲線を描くことでより美しく、あたたかみを感じる作品になります。

春はミナクール、夏はサケのふるさと館に数十点の作品を出品し「割り箸アート展」を開きました。

平山さんの作品展では、だれでも自由に作品を触れることができます。「たとえ壊れてしまったとしても直せば良いことです。実際に手で触れることで、木の作品が持つ独特のぬくもりを体感してほしい」とやさしく語ります。

作品展だけでなく、これからは割り箸の作品をつくる体験教室などの場を増やしていきたいと考えています。

「以前、町内会館で開いた教室に参加していたおばあちゃんが、完成した

作品を両手でかかえるように大切に持ち帰っていて、そのときのうれしそうな笑顔は今でも忘れることができません」と平山さん。子どもから高齢の方までだれでも簡単に、安全に体験できるように、教室ではカッターナイフを使わないなどの工夫をしています。

「機械ではなく、自分の手で一生懸命につくった作品には気持ちが込められます。手や頭を使うことの楽しさ、つくり上げる喜びをたくさんの方に伝えていきたいですね」と力強く語ってくれました。



平山さんの作品

人のいる風景
SCENERY OF PEOPLE



平山

AKIO
HIRAYAMA

昭男

さん